

お念仏と共に ～ 如来に念じられて生きていこう ～

御遠忌委員の皆さん

二〇一八年十一月二十六日



迫りくる「古い」に「病い」

目をそらし 気晴らしすれども

「死」の足音は 高まるばかり

…… 人間だけにある老・病・死の畏れおそ

(生・死の矛盾)

いくら ワイワイ 騒いでも

最後は いつも 一人ぼっち

…… この淋しさはどこから来るのか？

(自・他の分裂)

善いだの悪いだの 損だの得だのと

騒ぎ立てては 日が暮れる

…… 安まる時は いつ 来るのか？

(善・悪のとら囚われ)

「生死・自他・善悪」が矛盾対立するのは

そこに隠された原因があるから

生も死も 自分も他人も 善も悪も

「違ったままで みな尊い」といだけける

「一如(いちによ)の世界」が待っています

仏法を聞きませんか

念仏申していきませんか

ご門徒さんにごんにちは!

第十四回

今回は、勝福寺の前坊守彰子^{あきこ}おばあちゃんをお訪ねしました。大正13年生まれの94歳ですが、目が見えにくいか耳が遠いといった事もなく、食欲も若い人に負けないほど旺盛で、とても元気です。

生まれたのは福岡市。旧制福岡高校の先生だった父親の仕事の関係で、女学校1年生の終わりまで住んでいました。兄弟は男3人、女3人の6人兄弟、上から2番目の長女です。父親は優しくったそうですが、中津藩の家老の娘だった祖母の躰^{しづめ}がとても厳しかったそうです。小学校時代は算数が得意だけど、とてもおとなしく目立たない子どもだったそうです。今で言う「いじめ」にも遇^あったそうです。女学校2年生になるとき、父親が国から教科書の作成を命じられ、東京に移りました。転校した女学校は靖国神社の近くに

あつたそうで、その学校の専攻科在学中に父親が結核になり、母親も入院したため母に代わって看病しましたが、父親は52歳で亡くなりました。家族は一家の大黒柱を失い、

「あとは、おまかせ」
藤谷彰子 (勝福寺前坊守)

戦争も激しくなったため、父親の実家がある旧豊川村の樋田に帰ってきました。彰子おばあちゃんも樋田に帰ってきてから、四日市にあった税務署に就職し、終戦後まで勤めたそうです。戦後、インフレと農地解放で何もかもなくなり、お兄さんが大学院を途中で辞めて帰り、旧制宇佐中学校の先生になって一家を養ったそうです。彰子おばあちゃんは勝福寺の

門徒総代長さんのお世話で、昭和22年6月に勝福寺に嫁いで来ました。夫の弘道さんは19歳、彰子おばあちゃんが23歳の、姉さん女房でした。当時の勝福寺は、弘道さんの父親が昭和20年に結核で亡くなり、その看病をした姉も結核がうつって亡くなっていました。また弘道さんの母親は若くして中風がでて、体が不自由だったので「女手」が欲しくって結婚

をのぞまれたのでした。結婚した翌年の5月、今の知道任職が生まれたのですが、その年の9月には弟も結核で亡くなり、そのショックでお姑さんも亡くなってしまいました。弘道さんが「一人ぼっちになってしまった」と淋^{さび}しそうに言っていたのが忘れられないそうです。おばあちゃんの波乱の人生はまだまだ続きます。子どもを二人(知道、邦子)授かりますが、

弘道前住職はお寺を継ぐことに納得がいかず、三度家出をしたそうです。一度は、東京に居ることがわかったので子どもを実家に預けて、夜行列車で迎えに行きました。しかし、なお納得できないとお寺を飛び出しましたが、最後は自分で、裏口からひよこつと帰ってきたそうです。弘道前住職が家出を三度もしたと聞きびっくりして、「心細かったでしょう。たいがいの人



は実家に帰るとかするんですが、よく我慢できましたね」と聞くのと、「樋田の実家には妹や弟など大勢の家族がいるので帰るわけにはいかなかったし、誰もいないお寺の方が落ち着いたのよ」と淡々と話してくれました。お寺は昭和46年に本堂や庫裏^{くら}の改修をしましたが、それまでの本堂は戦時中、軍に没収され、糸口山に疎開してきていた小倉

造兵廠^{ぞうへいじょう}に学徒動員された学生たちの宿舎になったりして、荒れていました。庫裏は雪が降ると階段まで降り積もり、本堂は雨が降ると畳を上げたり、台風が来ると飛ばされないように障子を台で支えたりで大変だったそうです。昭和63年に知道夫妻に継承するまでの42年間、弘道住職を支え、好きな縫い物をしながらお寺をしつかり守り続けてきた彰子おばあちゃんです。

昔の勝福寺の様子をお尋ねすると、「昔は今と違い、お寺に入りする人も少なく、お寺に来る人は法事や葬式を頼みに来る人ぐらいだった」そうです。最後に「勝福寺がどんなお寺になって欲しいですか」とお尋ねしました。彰子おばあちゃんは「あとは、おまかせ」といっものにこやかなお顔で答えてくれました。彰子おばあちゃんの年齢は94歳。来年は勝福寺での宗祖親鸞^{しんらん}聖人七百五十回御遠忌法要があります。もつともつと長生きして勝福寺を見守ってください。(文責 渡辺 重昭)

御遠忌委員会だより

11月26日に、第八回御遠忌委員会を

開催しました。ご報告します。

事務局長 渡辺和義

御遠忌本部会を新設

御遠忌委員会の中に基本的な計画案を検討したり、話し合われたことを執行していく「御遠忌本部会」を設置する。

【構成】 向野茂委員長・松尾由美子副委員長・松本順副委員長・渡辺重昭副委員長・渡辺和義事務局長・牧本和孝会計・藤谷知道住職・藤谷純子坊守

お待ち受け間法会 後半十回について

【講師】 田畑正久・村田和樹・伊藤元・延塚知道・百々海真・ユ ヨンジャ・牧野桂一・荒木半次・加来雄之・横川香正の各先生

【会費】 五百円

【案内方法】 講師の一覧表を載

せたチラシを作り、門徒さん及び一般市民へ配布
【聞き書き】 毎回作成し、次の会に配布

御遠忌法要

11月23日(土)に「恵信尼公七百五十回御遠忌法要」を厳修する。
・記念法話 渡辺愛子先生
11月24日(日)に「親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」を厳修する。

記念法話 狐野秀存先生
*内容については、今後、法要部会で検討していく

これからの勝福寺の あり方について

・総代会の見直し
・門徒総会
・報恩講等の当番のあり方

・お寺の会計

・お寺の活性化

*以上の五つの課題について組織部会で検討

勝福寺誌編集

渡辺重昭さんより編集の構成について説明があり、承認される。

テーマ作品の募集(新)

テーマに関する随想・俳句・短歌のほか写真や書などを募集していく。

記念法話の出版(案)

御遠忌当日の記念法話とお待ち受け間法会の聞き書きで記念冊子を作成する。

荘厳工事について(新)

前回の修復から三十年が経過し、内陣等が痛んできているので御遠忌までに修復する方向で検討。
・内陣、金箔の修復・お幕障子の張り替え・襖の張り替え・仰拝幕の新調など、業者に見積もりをしてもらい、御遠忌委員会

会計

で検討していく。最終的な案ができた段階で総代会にかける。

御遠忌法要及び御遠忌に向けての関連事業を行うための予算及びその財源について、御遠忌委員会
で精査していく。

以上



「この本山でもしたし、四日市別院でもしたのに、なんでまた、勝福寺で、御遠忌をするの?」
こんな質問を受けました。

私達の家のお内仏には、中央に阿弥陀如来を安置し、その両隣に、その教えを私達に伝えてくださった親鸞聖人と、本願寺を再興された蓮如上人をお祀りしています。そして、その次に浄土へ帰られたご先祖様の法名を祀っています。

真宗門徒は、親鸞聖人の報恩講を大切な仏事(聖人のご苦勞を憶い、教えを聞く集い)として勤めてきました。同じように、ご先祖のご法事も、報恩の心でもって勤める報恩講と言える仏事です。

でも私たちは、なかなか親のご恩さえ思えません。ましてや、罪深く悩み多い私達の助かる道を「ただ念仏して」とお念仏を勧めてくださいました祖師方のご恩は憶えないものです。だから何度でも何度でも、新しい気持ちで報恩講を大切に勤めてきたのだと思います。

如来のご恩・善き師善き友のご恩を思えば、この世の苦勞は「如来の励まし」と曾我先生はおっしゃいました。何につけてもご恩が感ぜられることが、私達の幸せでないでしょうか。

この度の親鸞聖人の七五〇回御遠忌をチャンスとして「親鸞様、なぜ私にお念仏を勧めるのですか?お念仏は私に悔いのない人生を開いてくださるのですか?」と聞いてみませんか!
そして「この度は私のための御遠忌でした。ナンマンダブツ」と申せる時を迎えることになり
ますように。

お待ち受け聞法会に参加して

2月から始まったお待ち受け聞法会が、11月28日の親鸞聖人御正忌の日に10回目の聞法会を終えました。そこで、6名の方に、感想を書いていただきました。



小林 聖
(院内)

今まではお経を読むこと等なかった私ですが、聞法会に回数を重ねて参加するようになってから、今ではお経を読むことが出来るようになり、喜びを感じています。

住職さんの話は仏教の起りから浄土真宗の教えの話し等、難しい話ばかりでしたが、少しは理解して吸収したいと思えます。

坊守さんの話は日常的な内容で、私自身を振り返る機会が生まれました。その言葉は我執です。今までの長い会社生活において、自分の心の中に基準を持ち判断して色々な事、又は相手に

対して如何に対応して来たか思い返すと後悔頻りです。今後は心の基準を取り除き、相手の良い部分を見つけるように努めていきたいと思えます。

今後も聞法会に参加させて頂き、法話を聞いて学び、悔いる事の無いよう過ごしていきたいと思えます。



後藤アヤメ
(大塚)

「出会おう 語ろう 今ここで」のスローガンにあるように

仏教について何度も聞いてきました。今回もその出合いがあれ

ばと、今回のお待ち受け聞法会に参加させて頂いております。住職さんが、真宗の八百年余りの歴史と親鸞聖人のそのすさ

まじき奥深い生涯を説いて下さっております。仏教とはどんな教えかなと思う時、はっきりした答えは出てきませんが、本願に添ってそこにたどり着く姿勢とか、その道筋ではないかと思えました。

それくらいしか考えられない私に、人にある苦悩は仏様の方から手をさしのべて示して下さいのだから、仏様の教えのままに、ただ「ナムアミダブツ」

「ナムアミダブツ」と唱えることだろうと思えます。

又、坊守さんのお話の中で、さまざまな妙好人の方の実体験を聞くことが出来ました。五十嵐さんの並々ならぬ苦勞と心痛の時期、五十嵐さんは「一切皆苦」と考えられた後に、「苦は真実なり」とある先生の言葉を聞き、悟つたのだそうです。

又、榎本先生の詩の中に「どうにもならんことは、そつとそのままにしておく」念仏者らしい言葉で、なんだか私もほっとしました。これか

らも少しづつ学ばせて頂きます。



加来周子
(院内)

お寺に通うようになって二十余年、ただ、皆さんに会えるのが楽しくて過ごして来ました。

私の中では何か変わったかなと考えてみました。子育ては親も共に成長するものと聞いていました。楽しい事もありました。楽しい自分の考えをおしつけていた様です。両親と生活を共にしていた頃も、自分なりにやって来たつもりです。

でも振り返ってみると気持の余裕がなかったのでしょうか。

今聞法を続けながら、ふっと思い出すと、その頃この様な機会があつて自分を見つめる事が出来ていたらと思うのです。

ある先生のお話の中で、わかつたと思つた時からうそになる“おまえはおまえで丁度良い”それを聞いた時はスーと気持ち楽になりました。これからは私は私らしく毎日を送って行こうと思えます。



小林好枝
(宗像市)

知道先生は『愚禿釈親鸞―その生涯と教え 恵信尼公―その生涯とお便り』の本を出版して下さい、これを下敷きとしてお説き下さいました。

ご生涯を知ることによって「教え」が頂けるということがあります。先生は詳細に聖人のご生涯に肉迫して、時には主観的言葉を混えつつ「教え」を説いて下さいました。

心に残つたことは、九十年のご生涯で色々な苦難に出会われ、「承元の法難」では、親鸞聖人は越後の国へ流罪となりました。聖人の教えの底を流れているのは、赦免までの四年間、妻子を伴つての流罪の内面化でありました。「人間」という在り方

に対する深い悲しみが、いたる所にあふれています。配所へ赴く旅は、真実に生きることの厳しさを、身に刻み込む旅であつたに違いない、と思えました。



渡辺重昭
(四日市)

聞法会に通う楽しみ

1. 先ず最初に、受付でハンコを押してもらおう。これがとても嬉しいんです。子どもの時、夏休みのラジオ体操で、上級生から出席のハンコをもらおうと、「今日一日どんなことして遊ぶか。良いことがあるだろうか」とわくわくした昔の記憶が蘇ってきます。同じように、今日の聞法会ではどんなお話が聞けるんだろう、と楽しくなります。

2. 坊守さんの妙好人についてのお話し。妙好人って江戸時代や戦前の話で自分とは縁遠い人だと思っていました。それが五十嵐務さんの話を聞きながら、毎日目にする東別院にお勤めになっっていたなんて。それも住職や坊守さんと交流があったなんて。わくわくするとともに、妙好人がとても身近な存在に感じられました。

さて、次回からは後半の10回が始まります。どんなわくわくするような聞法会が始まるか楽しみです。



本多加代子
(豊後高田)

この一年、勝福寺さまの聞法の座に加わらせて頂き、何より先にこの聞法の予定を入れ、楽しみにしていました。

念仏をよるこんで生きた方々のお話は、それぞれ、お念仏に出会われ、一日一日を大切に生きて、その中でどうすることもできない悲しみや苦しみがお念仏に照らし出され、心の奥からお念仏が湧き出てきていることに気づきました。その一日、一日がお念仏が心の中に息づいて、お一人お一人がお念仏そのものに思えました。それは、私の胸を熱く一杯にさせて涙の出ることが度々でした。

「ただ念仏」といわれるのは、人は一日一日一生懸命生きておれば、必ずや自分の力ではどう

することもできない苦しみや悲しみに出会い、お念仏に目覚めることなのでしょう。お念仏の教えにやっと出会った私は、未だ心の中心にお念仏が居るようには思えないのです。これから聞法をして、一瞬一瞬の自分に会えるように暮らしていきたいと思えます。



長尾正子
(四日市)

いつもお寺にお参りされる長尾さん。どんな仏縁があるのか、教えてくださいました。

私は昭和11年生まれ、今年82歳になります。生まれたところは国東の方でしたが、小学校に入学する前に大田村に帰ってきました。実家はお寺です。

私は6人兄弟の末っ子で、姉兄から可愛がられ、甘えん坊で育ちました。姉3人は師範学校、女学校と進学し、さびしかったので、休みで帰ってくるのが唯

一の楽しみでした。家族がそろった時は、仏様に全員でお参りしてお経をあげる習慣でした。

私は学校を卒業するや洋裁、編み物学校に行きました。習い始めて3年目ぐらいで父親が病気になる看病のため学校をやめ、家の手伝いに帰りました。その傍ら編み物等をしていました。

主人との出会いは母親の知人の紹介で、四日市の小菊に住むことになりました。主人は6人兄弟の長男で、宇佐中学を卒業後、郵便局勤務でした。母と弟と一緒に暮らしましたが、楽しくもあり、色々教えてもらい勉強になることばかりでした。

ある日、夫が、勤務が終わり急に気分が悪くなって、救急車で病院に搬送されました。子どもを連れて病院に行ったら、酸素吸入をしていました。本人も「ちよつと休養すれば治る」と言っていたのですが、次の朝、発作を起こし、亡くなりました。

私はショックで、立つのも立って、しばらく座っていました。

これより第二の人生の始まりです。毎朝、お仏壇のお花の水をかえ、お仏飯をあげ、お経を

あげることが一日の始まりになりました。掌を合わせるだけで気持ち落ち着き、仏さまは一番大事な方ですね。

主人が亡くなった時、子どもは小学4年生と中学1年生でした。働くために、高田にいた姉の近くに引っ越しました。高田にいた間は、命日には四日市まで欠かさず、お寺参り、お墓参りをしました。

四日市に家が建ったので、お寺もお墓も四日市なので、皆から「帰った方が、よい」と言われ、また四日市に住むようになりました。

こちらに帰ってから、お寺にも30年あまりお世話になっていきます。お彼岸、報恩講とお参りして、知っている人がたくさんできて、法要や聞法会ではその人たちと会えて楽しいですね。

また、阿弥陀さまに掌を合わせれば気持ち落ち着き、有り難いですね。

報恩講の時は、お寺のお婆ちゃんから「長尾さん、福田寺さんへ、お齋を持って行って」と頼まれます。そんなことも楽しみの一つです。

真宗門徒の豆知識

お内仏って

何だろう？

(その3)



なぜ、お仏飯をあげるのでしょうか？

子供から聞かれたことはありませんか？「お母ちゃん、仏様はどうせ食べないのに何で上げるん？」と。

また「下げてきたお仏飯なんて硬いし、線香の匂いがして食べられないよ」と言う若い人もいました。

お米は命のもと、命を養うものであり、命そのものです。そのように阿弥陀仏は私達のいのちに成ってくださる仏様です。

「アミダ」の「ア」は否定語で「ミダ」は限量を表します。だから「アミダ」は限り

がない、無量という意味です。

私達の命は「ミダなる命」(限りある命)であって、仏

のいのちは「アミダのいのち」(永遠にして無量のいのち)です。「ミダなるいのち」の根源に、「アミダのいのち」が

いきいきと生きている、そのお姿がご本尊の南無阿弥陀仏です。お仏飯をお供えし、下げていただいて仏様の無量寿・つまり生死を超え、自他を超え、善悪を超えたアミダのいのちを感じて生活していただきたい願われているのです。

次にお灯りについて
味わってみましょう。

「南無阿弥陀仏」はサンス

クリット語(インドの昔の言葉)の音写で、意味は「正信偈」の始めにあるように「帰命無量寿如来 南無不可思議光(無量寿如来に帰命し、不可思議光(如来)に南無したてまつる)」です。「無量寿」のアミダのいのち(限らないいのち)のことで、内容はアミダの慈悲のはたらきをあらわし、「不可思議光」の「光」は仏の智慧の明るさをあらわしています。

仏様の智慧と人間の知恵の一番の違いは、仏智は我執(がしゅう)から解放されているので、あるがままに見ることができます。それを如実知見(にょじつちけん)といいます。私達は自分では気づいていませんが、なかなか強い色メガネを掛けてみているのです。それで怖(おそ)れたり苦しんだり恨んだりしているのです。

「一切の怖(おそ)畏(おそ)は、みな我見より生ず。我見は、みなこれ諸々の衰と憂と苦の根本なり」(龍樹) 人間知の闇は、仏様の智慧の光に照らされないと知ることはいけません。

帰敬式講座を

受けて

松尾由美子(四日市)

永いことお寺に通いながらも、日々の生活を送る事に振り回されている私です。帰敬式の講座が開かれ、おかみそりを受ける心構えとして受講しました。

仏事を知っているようで知らない常識をおもしろおかしくクイズ形式で紹介されました。

帰敬式の日は、

阿弥陀如来のお弟子になれるのだと思いました。熱しやすく冷めやすい私です。「鉄は熱いうちに打て」と



言います。今がその時ではないかと思えます。人生巡り会い、良い時に出会ったなと気づかせてもらいました。思いがけないと気づかないものです。

晩秋、紅葉を見に出かけた時、お寺の境内ではきれいに色づいた銀杏や楓の黄色や赤色が青空に映え、足元では落ち葉でジュウタンのように埋め尽くされています。いずれ自然に帰って行くのでしょうか。時には風を受けてシャワーの様にハラハラと私達に舞い降りてきました。

自然の流れに逆らわず、今年の皆様と聞法し、寺色に染まって、地に足をつけ、味わいのある生活を送りたいと思っております。

編集後記

今回の「ご門徒さんこんにちは」を「ご門徒さん」...

お元気な前坊守さんの72年間にわたり勝福寺を護り、

見守ってきたこと。そして未来を思う気持ちがおまかせ」という言葉に、詰まっているんだなあ、と感じたインタビューでした。

渡辺 重昭